



2019年7月31日

Vol
126

“投信だからこそ”という 商品選びの切り口ー先物活用を例に

商品選びについて、「シンプルが一番」という意見があります。具体的には、主要な株価指数などに連動する、いわゆる「インデックスファンド」を自分で選んで組み合わせる保有するのが最もスマートだ(賢い)という意見です。

もちろん、まったく理解できない商品は避けるべきだと思いますが、「投信だからこそできること」という視点からの商品選びもあるはずです。

最近お問い合わせの多い、投信の商品設計における「先物」の活用について、見てみましょう。

たとえば先物も 「何のための先物活用か」の視点で考える





投信には目的がある

商品選びは「シンプル(なもの)が善で、複雑は悪」というほど単純ではありません。その前に考えるべきなのが、目論見書などの冒頭に書いてある「ファンドの目的」と「ファンドの特色」です。目的や特色が先にあり、それを実現する手段として初めて、商品の構造がシンプルになったり複雑になったりするのです。

最近お問い合わせが増えた投信における先物活用も、その投信が「ハイリスク・ハイリターン」を目指す投信なのか、効果的な分散投資を実現しようとする投信なのかを先に確認する必要があります。つまり「何のための先物活用か」という視点です。

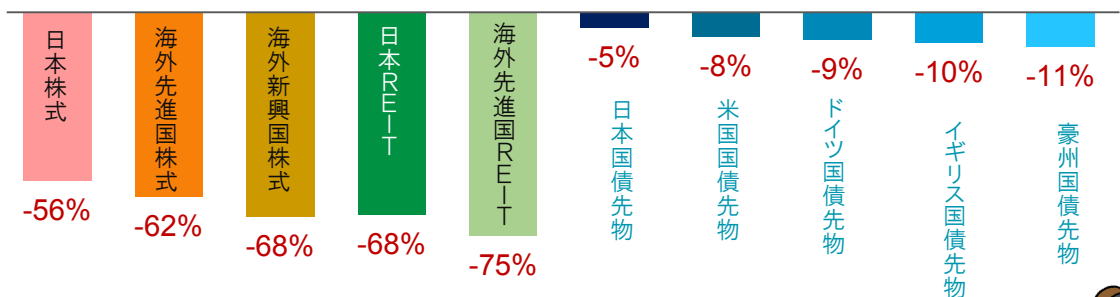
先物は「何に対する先物か」が大事

また一般に、「商品先物で大損した」など投機的なイメージの強い先物ですが、「何に対する先物なのか」が重要です。なぜなら、先物の価格は元となるもの(原資産)の価格を基準として動くから。

例えば下図のように、先進国国債の先物は、あくまで国債が原資産であるため、株式やREITに比べて、下落率がとても小さいことがわかります。

主要資産の最大下落率(最大ドローダウン)

●期間: 2003年3月末~2018年9月末、月次



日本株式: 東証株価指数(TOPIX、配当込)、海外先進国株式: MSCI KOKUSAI 指数(配当込、為替ヘッジなし、円ベース)、海外新興国株式: MSCI エマージング・マーケット指数(配当込、為替ヘッジなし、米ドルベース)を日興アセットマネジメントが円換算、日本REIT: 東証REIT指数(配当込)、海外先進国REIT: S&P先進国REIT 指数(除く日本、配当込、円ベース)、先物の国債(日本、米国、ドイツ(ユーロ建て)、イギリス、豪州): S&Pの各国10年国債先物指数(エクセスリターンベース)

信頼できると判断したデータをもとに日興アセットマネジメントが作成
上記は過去のものであり、将来の運用成果等を保証するものではありません。

nikko am

2 コールセンター
0120-25-1404

営業時間 平日 9:00~17:00



当資料は、日興アセットマネジメントが投資信託の仕組みについてお伝えすることなどを目的として作成した資料であり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、当資料に掲載する内容は、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。